明倫紀要 17 (1)　51-53　(2014)

論　　文

仮名ひろいテスト物語文のキーワードごとの想起されやすさに関する検討

阿志賀大和，大平芳則
明倫短期大学　歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻

Analysis of Recallability of Each Keyword in Kana pick-up Test

Hirokazu Ashiga, Yoshinori Ohdaira
Department of Communication Science, Meirin College

注意機能や前頭葉機能のスクリーニングテストの一つとして広く用いられている仮名ひろいテストは，物語文の中にある，「あ・い・う・え・お」に○印をつけ，その正解数，作業数，ひろい落としの数，ひろい誤りの数から評価される．今回，仮名ひろいテストの物語文のキーワードごとの想起されやすさを，若年女子学生20名を対象に検討した．同時にウェクスラー記憶検査の論理的記憶Ｉとの相関も検討した．

物語文中の「おばあさん」と「壷」は全ての被験者が想起していた．平均想起語数は物語文で6.2±2.4語，論理的記憶Ｉで23.8±4.1語であり，物語文と論理的記憶Ｉの間に相関は認められなかった．

「おばあさん」は文中に４回，「壷」は３回使用されているが，その他の語は１度ずつしか使用されておらず，語句の使用回数が想起される割合に差を生じさせた要因であると考えられた．また，論理的記憶Ｉと物語文の間に相関が認められなかった要因として，両検査に求められる機能が異なることによると推測された．

キーワード：仮名ひろいテスト，物語文，想起，注意
Keywords: Kana pick-up Test, Story, Recall, Attention

はじめに

神経心理学的スクリーニングテストとして用いられる評価バッテリーには様々なものがあり，そこで何らかの問題や低下を示した場合には，より詳細な評価を行うこととなる．しかし，スクリーニングテストについても結果を詳細に読み解き，複数の検査結果を組み合わせることで，対象者の症状をより深く理解することに繋がる．金子ら[1]により開発された仮名ひろいテストは，神経心理学的スクリーニングテストの一つであり，注意機能や前頭葉機能を評価する方法の一つとして臨床で広く用いられている．また，なすべき行動の内容を覚えておく内容想起と内容を自発的に思いだす存在想起といった記憶との関連についても調査されており，仮名ひろいテストは，どちらの記憶に障害があっても成績が有意に低下することが示されている[2]．

仮名ひろいテストには，無意味綴り課題（以下，無意味綴り）と物語文課題（以下，物語文）があり，いずれも文字群の中の「あ・い・う・え・お」の５文字にできるだけたくさん見落とさないように○印をつけることが求められる．結果は，２分間に読み終えた部分のひろい上げるべき文字数（作業数），正しく○をつけた数（正解数），作業数から正解数を引いたひろい落としの数，「あ・い・う・え・お」以外に○をつけたひろい誤りの数に分けて記録される．また，物語文では，仮名ひろいを行いながら，同時に物語の内容を把握することも求められ，課題終了後に物語内容の把握の可・不可が判定される[3]．これまでに，正常者のカットオフ値や内容把握率，年齢・教育年数ごとの平均値は求められている[3-5]．しかし，物語文におけるキーワードごとの想起されやすさについて調査した先行研究は，調べた限り見当たらない．そこで，注意機能や前頭葉機能，記憶を評価するうえで，仮名ひろいテストを用いた際に，より詳細に対象者の症状を把握するための基礎デー

原稿受付：2013年11月13日，受理　2013年11月14日
連絡先：〒950-2086　新潟市西区真砂3-16-10　明倫短期大学　阿志賀大和　TEL.025-232-6351（内線146）

タを提供することを目的に，物語文におけるキーワードごとの想起されやすさを検討した．

対象

高次脳機能に影響を及ぼす脳神経疾患や外傷の既往がない本学歯科衛生士学科生30名（全て女性）のうち，後述する方法の基準を満たす20名を対象とした．被験者の選定には，本学歯科衛生士学科教員が複数学年より無作為に抽出し，著者らは被験者選定に関与しなかった．被験者の年齢は20.2±1.9（mean±SD）歳であった．

なお，調査を開始するにあたって，明倫短期大学歯科衛生士学科会議に諮り承認を得た．また，被験者本人には，口頭および書面にて説明し署名にて同意を得た．

方法

1．被験者の基準

1）被験者の対象年齢を若年とするため10代および20代に限定した．

2）正常範囲内の記憶能力であることを確認するため，ウェクスラー記憶検査[6]の論理的記憶Ⅰ（以下，論理的記憶Ⅰ）を実施し，その結果が20～24歳群の-1SD範囲内（素点20点以上）にあることを条件とした．

論理的記憶Ⅰは物語Aと物語Bの二つの短い物語からできており，検査者は被験者に物語を読んで聞かせ，それぞれの物語の後で，被験者は記憶を頼りにその物語を話すことが求められる．

3）正常範囲内の注意機能であることを確認するため，仮名ひろいテストの無意味綴りを実施し，年代別（10～39歳）カットオフポイントの33点以上であることを条件とした．

上記1）～3）の全てを満たしたのは30人のうち20人であり，その20人を対象とした．

2．実施手順および方法

1）同一条件で実施するため，全ての被験者に対して論理的記憶Ⅰ，無意味綴り，物語文の順に実施した．

2）論理的記憶Ⅰおよび無意味綴りは正規の施行方法に基づき実施した．物語文は仮名ひろい課題と同時に物語文を読んでいることを確認するため，音読にて行った．また，正規の方法では，制限時間は2分間であるが，キーワードごとの想起されやすさを検討するため，物語文については2分間で終了せず，全文を音読してもらった．ただし，実施前には「できるだけ早く行なってください」と教示を行った．

3）物語文実施後すみやかに，内容について口述してもらい，それを録音した．

4）キーワードは，浜松式高次脳機能スケール実施手引きに記載されている6語（以下，手引き語）[3]と，本文中の内容を把握するうえで重要な語句であると考えられる独自に加えた語句（以下，独自語）の合計16語とした．独自語としたものは「昔，朗らかに，何一つ不足はない，元気で陽気，道端，溝，持ち主，穴，周りに誰もいない，花（を活ける）」の10語句である．

結果

1．平均想起語数

物語文の想起語数は，平均6.2±2.4語であった．また，論理的記憶Ⅰの想起語数は平均23.8±4.1語であった．両者の相関関係を検討した結果，両者の間に相関は認められなかった（r＝0.323）【図1】．

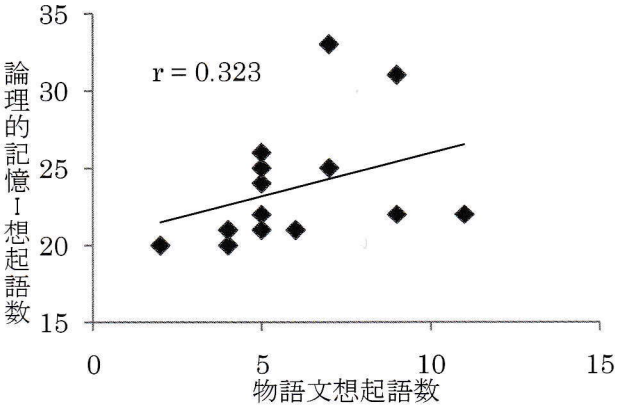

図1　論理的記憶Ⅰと物語文の想起語数の相関

2．物語文における想起語句の内容

それぞれのキーワードを想起した被験者の比率を図2に示す．なお，類義語は想起されたものとした（例：貧乏→貧しい，何一つ不足はない→暮しに困っていない）．最も多く想起された語は「おばあさん」と「壷」であり，全ての被験者が想起していた．次に多く想起された語は，手引き語の「貧乏」，「その日暮らし」，および独自語の「花（を活ける）」であり，50～60％の被験者が想起していた．一方で，独自語の「元気で陽気」は最も想起される割合が低く，5％の被験者のみであった．また，独自語のみならず手引き語においても，「使い走り」のように想起される割合の低い語があった．

一部の被験者において「その日暮らし」を「その，

ひぐらし」と想起することがあった．

3．課題実施時間について

全被験者の物語文音読時間は平均128.9±31.3秒であった．正規の施行方法は2分間で打ち切るが，本研究においては全文を読んだ後に想起される語の割合を調査するため，2分で打ち切らなかった．そのため，全被験者の平均実施時間は規定の2分を超過したものの，それはわずかであり課題自体は正規の実施時間から著しく延長することなく行えたといえる．

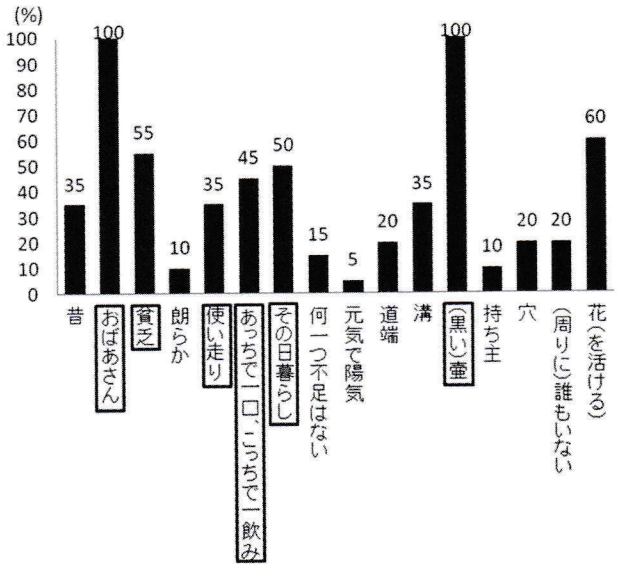

図2　物語文のキーワードごとの想起率

考察

図1に示すように論理的記憶Ⅰと物語文の結果の間に相関は認められなかった．その要因として，両検査に求められる機能は異なることが背景にあると推測される．つまり，論理的記憶Ⅰでは情報は聴覚的に入力されるが，物語文は視覚的に情報が入力されるという違いがある．また，論理的記憶Ⅰは物語を聴くことのみに注意を向け記憶すればよいが，物語文では○印をつけるべき五つの母音を認識し行為に移すことと，文章の内容を要約して記憶することが互いに干渉されずに実行できなければならない[7]．そのためには注意を分割する必要がある．

図2に示すように，キーワード毎に想起される割合は異なることが確認された．最も多く想起された語は「おばあさん」と「壷」であり，これらは物語文の内容を把握するうえで重要な語であるため，想起される割合が高かったと考えられる．また，手引き語の「貧乏」,「その日暮らし」,および独自語の「花(を活ける)」においても50～60％の被験者が想起していた．このことから，それらも内容を把握するうえで重要なものであると考えられた．

さらに，「おばあさん」は文中に4回，「壷」は3回使用されているが，その他の語は1度ずつしか使用されていない．そのため，語句の使用回数の違いも想起される割合に差を生じさせた要因と考えられる．独自語の中で唯一想起される割合の多かった「花(を活ける)」については，1度しか文中では使用されていないが，キーワードとした語の中で最後に現れるものであり，新近性効果によると推測される．

謝　辞

本研究を行うにあたり，多大なるご尽力を賜りました明倫短期大学歯科衛生士学科 本間和代学科長，小野真奈美先生，ならびに研究に快くご協力いただきました被験者の皆様へ深甚なる謝辞を表します．

本論文の一部は，第11回明倫短期大学学会において発表した．

文　献

1）金子満雄，植村研一：新しい早期痴呆診断法と同法を用いた地域集団検診の試み．日本医事新報　3349：26-30，1988
2）前島伸一郎，種村純，大沢愛子ほか：高齢者における展望記憶の検討―とくに存在想起と内容想起の違いについて―．リハビリテーション医学43：446-453，2006
3）今村陽子：臨床高次脳機能評価マニュアル2000．第2版，新興医学出版社，東京，2005
4）祖父江敬子，武田祐子，土田昌一ほか：Ⅲ-6痴呆スクリーニングテストの分析．認知リハビリテーション3（1）：44-47，1998
5）原田浩美，能登谷晶子，中西雅夫ほか：健常高齢者における神経心理学検査の測定値－年齢・教育年数の影響－．高次脳機能研究26（1）：16-24，2006
6）杉下守弘：日本版ウェクスラー記憶検査法．日本文化科学社，東京，2001（Whchsler, D.：Wechsler Memory Scale Corporation, San Antonio, 1987）
7）今村陽子：脳神経外科臨床における高次脳機能検査法と意義．認知リハビリテーション2（1）：8-25，1997